オーディオ実験室収載

ディジタルアンプによるマルチアンプシステム

１．始めに

オーディオ実験室のケーブルのページで、一連のスピーカーリベラメンテの試聴においてスピーカーリベラメンテの試聴（5)―最弱アンプと最強スピーカーへの適用―と称して、ステレオ誌付属の LXA-OT1 を JBL4350A のマルチアンプ駆動に使用した結果を報告しました。

今回、LXA-OT3 が加わったことにより、再度 JBL4350A のマルチアンプ駆動に使用してみました。

２．マルチアンプシステムの駆動アンプ

現有の JBL4350A のシステムは、チャンネルデバイダーとしてアキュフェーズの F15 を使用し、クロスオーバーは下記のような 250Hz と 12.5KHz でマルチアンプ駆動を行っています。

① プリ→P&G フェーダー→チャンネルデバイダー（>12.5KHz）→Pilotone 6V6pp →PT-R7+村田セラミックツイーター

アナログ RCA ケーブル：リベラメンテ XLR＋リベラメンテ＋LINN

スピーカーケーブル：並行 2 芯

② プリ→P&G フェーダー→チャンネルデバイダー（12.5KHz >>250HZ）→芦屋ベルステレオ RCA 45pp→ツイーター＋ホーン＋ミッドバス

アナログ RCA ケーブル：リベラメンテ XLR＋リベラメンテ＋リベラメンテ

スピーカー側にムジカライザー

スピーカーケーブル：スピーカーリベラメンテ

③ プリ→P&G フェーダー→チャンネルデバイダー（<250HZ）→Heath Kit KT88pp →ダブルウーファー

アナログ RCA ケーブル：リベラメンテ XLR＋リベラメンテ＋ベルカント

スピーカー側にムジカライザー

スピーカーケーブル：スピーカーリベラメンテ

以上の PT-R7+村田セラミックツイーターの駆動アンプを Pilotone 6V6pp から LXA-OT1 に、ツイーター＋ホーン＋ミッドバスの駆動アンプを 45pp から LXA-OT3 のモノ使い 2 台に、ダブルウーファーの駆動アンプを KT88pp から LXA-OT1 のモノ使い 2 台にと変更します。

なお、上記の LXA-OT1 と LXA-OT3 すべてのオペアンプを Texas Instruments の NE5532AP に交換しています。

板の上	左：低域用 LXA-OT1（2 台）　中：中高域用 LXA-OT3（2 台） 右：スーパーツイーター用 LXA-OT1
板の下	低域用 W-6M（KT88pp）（2 台）
右	スーパーツイーター用 Pilotone （6V6pp）（2 台）

中高域用 45pp

３．ディジタルアンプによるマルチアンプ駆動の試聴結果

スピーカーリベラメンテの試聴 (5)では、低域と中高域のみをディジタルアンプに交換し、元の真空管アンプに比べて、やや湿度感や艶が後退し薄味になるものの格段の音質低下や駆動力不足による腰砕け感もなく、鑑賞に耐えるクオリティと音量で鳴らし切ることができるという評価でした。今回は、すべてのチャンネルを、オペアンプを NE5532AP に交換したディジタルアンプで駆動しています。

まず、言えることは、真空管アンプの現行システムでも、多重クロック入力と DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD の SDIF 伝送での DSD 変換を行っていることで以前の印象から随分と変ってきています。

真空管アンプからディジタルアンプに替えて驚いたことは、ほとんど違和感がないことです。わずかに高域の湿度感が不足することと、最低域の沈みこみが弱いくらいでずっと聴いていてもこれで十分という感じがします。JBL4350A でクラシックが楽しめるようになったのは、スピーカーリベラメンテの効果が大きいのですが、多重ク

ロック入力と DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD の SDIF 伝送での DSD 変換が加わってディジタルアンプでもパーフォーマンスが向上したものと言えます。

４．まとめ

ステレオ誌付録のディジタルアンプの駆動しにくい最強スピーカーシステムへの適用ということで、しかもヴィンテージの古典球アンプから基板 1 枚のディジタルアンプへの変更と言う極端から極端への試聴でしたが、ギャップの大きさを感じさせませんでした。LXA-OT3 のオペアンプの交換ではクラシック領域では Texas Instruments の NE5532AP はお勧めと言えます。

こういった結果から、このディジタルアンプの一番のメリットとして発熱量の少なさでエアコンの効きが悪くなるほどの真空管のオーディオにとって代わって夏場はこのままにしておこうかと思っております。

以上